OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「規則に従う」ということ : クリプキの「懐疑的議論」をめぐって
Author(s)	大石, 敏広
Citation	メタフュシカ. 1996, 27, p. 65-84
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66589
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「規則に従う」ということ

―クリプキの「懐疑的議論」をめぐって―

大石敏広

はじめに

言語を使うということ、すなわち言語の規則に従うということはどういうことか――これは後期ウィトゲンシュタインの主要テーマの一つであった。そしてこの問題がとくに注目を集めるようになった契機はソール・クリプキによる解釈であったと言われている。

クリプキの『ウィトゲンシュタイン――規則ならびに私的言語について』[1]におけるウィトゲンシュタイン解釈は、「規則に従う」ということはどういうことなのかという点についての考察を、ウィトゲンシュタイン『哲学探究』[2]（以下『探究』と略記）の中核をなす議論と見なすものであった。クリプキによれば、『探究』の「規則に従う」という問題を扱う箇所（一三八―二四二節あたり）でウィトゲンシュタインは、「懐疑的議論」によって「懐疑的パラドックス」を見いだし、その上でそのパラドックスに対する「懐疑的解決」を提示した、ということになっている。

クリプキの議論は関連する諸問題が複雑に入り組んでいる。本論では、クリプキとウィトゲンシュタインの関係を論ずる上で論者が重要であると考える点に的が絞られる。なお、紙面の都合上ここでは、クリプキのウィトゲンシュタイン解釈の前半部分である「懐疑的議論」に関連する議論のみが取り上げられている。[3]

一　ウィトゲンシュタインの「パラドックス」？

クリプキは、ウィトゲンシュタインの「パラドックス」に、哲学が今日までに経験した中で最も根源的で独創的な懐疑論的問題を見た。[4]このウィトゲンシュタインによる「パラドックス」

の提示というクリプキの発想はまずもって、『探究』二〇一節の冒頭部分にその根拠が置かれている。その二〇一節の最初のパラグラフは次のようである。

我々のパラドックスはこうであった。規則は行為の仕方を決定できないであろう。なぜなら、いかなる行為の仕方もその規則と一致させることができるであろうから。そして答えはこうであった。いかなることもその規則と一致させうるならば、矛盾させることもできるだろう。それゆえここには一致も矛盾もないであろう。(A)

これに対して、上記の引用に続く次のパラグラフがしばしばクリプキの反対論者によって問題にされてきた。

ここに誤解があるということは、我々がこのように考えていくときに次々と解釈を立てていることの内にすでに示されている——あたかもそれぞれの解釈が、我々がその背後にあるもう一つの解釈に思い至るまで、我々を少なくとも一瞬の間安心させてくれるかのように。このことによって我々が示しているのは、解釈ではないような規則の把握、つまり各々の適用において〈規則に従う〉とか〈規則に反する〉と我々が呼ぶことのうちにおのずと現われているような規則把握があるということである。(『探究』二〇一節)(B)

「ここに誤解がある」の「ここ」はすぐ前を指していることは明らかである。それではそれは、パラグラフ(A)全体を指すのか、それとも「そして答えはこうであった」以下の後半部分だけを指すのか。前者であれば、「パラドックス」は誤解と関連しているということであろう。だが後者だとすると、「パラドックス」は誤解とは無関係であり、拒否されるべき対象ではないという解釈も可能となるかもしれない。こうした解釈は実際成立しうるのであろうか。(5)

引用(A)の前半部で言われていることは、「いかなる行為の仕方も規則と一致させることができる」という理由(前提)から、「規則は行為の仕方を決定できない」という結論になる(「我々のパラドックス」ということである。他方、後半部では、「いかなること(行為の仕方)も規則と一致させることができる」という前提から、「いかなる行為の仕方も規則と矛盾させることができる」が引き出され、そしてさらにここから「ここには一致も矛盾もない」と結論付けられる。つまり、両者共に、「いかなる行為の仕方も規則と一致させることができる」ということを前提した結果なのである。この「いかなる行為の仕方も規則と一致させることができる」ということがどういうことかは、『探究』一九八節の最初のパラグラフに述べられている。

「だが、ここにおいて私が何をなすべきかを、規則はいかにして私に教えることができるのか。たとえ私が何をしようとも、それは何らかの解釈によってその規則と合致させることができる。」――いや、そのように言うべきではない。むしろこうなのだ。どの解釈も、それが解釈するものと共に宙に浮いており、それが解釈するものの支えの役は果たしえない。解釈だけでは意味が定まらないのである。

「いかなる行為の仕方も何らかの解釈によって当の規則と一致させることができる」――これが問題の前提であろう。論点は、「解釈」と「規則」の関係についてである。そしてこの論点についてウィトゲンシュタインは、「ここに誤解がある」ということは、「次々と解釈を立てている」ことの内にすでに示されていると言うのである。

こうして、「ここに誤解がある」の「ここ」を、直前のパラグラフの後半部のみを指しているものと解釈したとしても、「我々のパラドックス」は「誤解」とは無関係であるとは言えないということになろう。引用（A）の前半部と後半部は同じ前提を共有しているのであり、引用（B）でのウィトゲンシュタインの批判はまさにこの前提に関するものなのである。「ここに誤解がある」という批判の射程は「我々のパラドックス」にまで及んでいると考えるのが妥当であろう。

さて、「次々に解釈を立てている」立場とは、「解釈でないような規則の把握」と対立する立場、つまり「規則を理解するということは、それについての解釈を与えることである」という立場（解釈説と呼んでおく）であろう。そうすると、ウィトゲンシュタインがここで主張していることは、引用（A）で述べられた「パラドックス」は誤解に基づくものであり、その誤解とは解釈説であるということであろう。「パラドックス」は、実際誤解の産物である解釈説を採った場合に生じざるをえないものであると言えようか。あるいは、「パラドックス」は誤解であるが、それが誤解であるということは解釈説においてすでに示されている、すなわち解釈説が誤解であるということから明らかになっているというようにも取れる。この場合も、「パラドックス」は解釈説のいわゆる必然的帰結であると見られていると言えよう。共に誤解であると考えられているわけだが。しかしいずれにしても、ウィトゲンシュタインは「パラドックス」を主張しているのではない。

確かに、ある人のある規則の把握（解釈）がその人の行為を決定するという解釈説に従うなら、「パラドックス」が当然のこととして引き出されてくるであろう。しかし我々は、「規則は行為の仕方を決定できない」ということは当然の事実であるとは言わない。我々は確かに、「規則は行為の仕方を決定している」といった表現を使うのである。ウィトゲンシュタインにとって

の問題は、こうした表現が実際どのように用いられているかを見ることであり、こうした表現に対する誤解を排除することである。かくして、クリプキの力説とは逆に、ウィトゲンシュタインは「パラドックス」を受け入れているのではなく、誤解として、あるいは誤解に基づくものとして拒否した上で、「解釈ではないような規則の把握」の存在を指摘していると結論づけることができるであろう。次に、クリプキの「懐疑的議論」の内容について見ていこう。

二　「懐疑的議論」の二つの側面とウィトゲンシュタインからの逸脱

クリプキが展開している「懐疑的議論」の概略を述べると次のようになる。[6] 数学の事例が取り上げられる（もちろん、この問題は言語一般に当てはまるものである）。例えば「68＋57」という計算は、私がかつて全く行なったことのない計算であると仮定する。私は今までに有限回の計算を行なっただけなのであるから、そのような計算例は確かに存在するわけである。さて、今この計算式の答えを求められれば、もちろん私は「125」という答えを得るであろう。ところがここでクリプキは「奇妙な懐疑論者」を登場させる。この懐疑論者は、私が与えるべき正当な答えは「5」であったと反論する。ここで懐疑論者が言いたいのは、「68」と「57」の和は「5」であるという算術的な意味において私が間違っているということではない。そうではなく彼は、私が過去において「＋」で意味していたものはアディション（加法）という関数ではなく、クワディション（quaddition）という関数であったと主張しているのである。ここでクワディション（記号は「⊕」とする）は、「もしx，y＜57ならば、x⊕y＝x＋y、そうでなければx⊕y＝5」と定義される。私はいま私の以前の語の使用法を誤って解釈しているというわけである。

ここでクリプキの懐疑論者はまず、私はクワディションではなくアディションを意味していたという何らかの「事実」があるのだろうかと問う。また、もし私が「＋」によってアディションを意味していたならば、（私の計算の正確さ、記憶の正確さに問題はないとして）私が「68＋57」という問題に対して「125」と答えることは正当であるということになろう。よって、懐疑論者はさらに、今の場合「5」ではなく「125」と答えるべきであると確信する何らかの根拠を私は持っているのかという問も提示する。かくしてこの懐疑論者の挑戦に対する返答も二重になる。それは第一に、クワディションではなくアディションを意味していたということを構成する「私についての事実」を示さなければならない。そしてその際、その「事実」は、「68＋57」に対して「125」という答えを私が与えるということを「正当化」

するものでなければならない。そのような「事実」はいかなるものか。クリプキの懐疑論者の答えは、そうした「事実」は存在しないというものである。だが私の過去における「＋」の実際の使用という行動を引き合いに出せないか。出せない。なぜなら、「＋」の記号を用いた私のこれまでの有限な計算事例に関してアディションと一致するが、それ以降の事例においてはそれと一致しない関数（今の仮定ではクワディション）が存在しうるからである。それでは、私の意識の過去の内的状態に関するある「事実」が私が何を意味していたかを確定できないか。これもできない。その理由は、仮定により「68＋57」の答についての指示を私は心の中で与えなかったのであり、また私の心の中にあったものは有限であるわけだから、私の過去の意識状態の全体は、私が「＋」によってアディションを意味していたという仮説と同様に、それによってクワディションを意味していたという仮説とも両立しうるという点にある。

私がアディションを意味していたという「私に関する事実」は存在しない――これが懐疑論者の見いだしたテーゼであった。ところで、過去において私がアディションを意味していたという「事実」がないとするならば、現在の私の語の使用についても同じことが言えるであろう。すなわち、現在においてアディションを私が意味しているという「私についての事実」なるものはありえないわけである。そうすると結局、何時いかなる時であっても私がある語でもってあることを意味しているという「事実」は存在しないということになる。かくして、クリプキには、「懐疑的議論」によって「意味」という観念は全く消え失せてしまい、「言語のすべてが無意味であるという、信じがたい、そして自己破壊的な結論がすでに引き出されてしまっているのではないのか」[7]と思われるのである。

以上がクリプキの「懐疑的議論」の骨子である。まず明確にしておくべきことは、このクリプキの「懐疑的議論」が持っている二つの側面――「構成的あるいは存在論的側面」と「認識論的側面」――についてである。[8]「存在論的側面」とは、私がアディションを意味しているということを構成する「私に関する事実」は何かという問題に係わっていた。これに対して「認識論的側面」は、「5」ではなく「125」と答えるべきだと私はいかにして知りうるのかという問題に係わるものであった。言い換えるとそれは、言語使用の「正当化」・「根拠」の問題である。そしてクリプキによると、前者の「存在論的側面」こそが「懐疑的議論」の真の問題なのである。[9]「認識論的側面」は、「意味といった事実は存在しない」という存在論的テーゼへと至るための補助的な役割を演じていたと言えよう。

だが、ウィトゲンシュタインがクリプキの言うような「存在論的な問題」に取り組んでいたとはとても思えない。クリプキにも分かっているように、[10]例えば「彼はその言葉によって～を

意味している」とか、「彼がその言葉によって～を意味しているのは事実である」といった表現を通常私たちが使うことをウィトゲンシュタインは否定しようとはしないであろう。実際我々は言語を使っているわけで、そこに有意味な言語使用、無意味な言語使用がある。「～を意味する」といった言い方をするということはウィトゲンシュタインにとって、そして当然私たちにとってもまったく正当なのである。ウィトゲンシュタインは、この我々の日常的な言語使用の実践に注目しながら、「意味する」とは、あるいは「規則に従う」とはどういうことかという問題について考察しているのだ。そして、伝統的な哲学の議論はウィトゲンシュタインにとって、我々の日常の言語使用についての誤解から生じてきたものであった。つまり、ウィトゲンシュタインが拒否しているのは、「意味」とか「事実」といった表現に対して哲学者たちが与える誤った説明であると言えよう（例えば、『探究』一一六－一三三節等を見よ）。

またクリプキは、自説を支持するものとして、ウィトゲンシュタインが「真」（そして「事態」・「事実」）という概念について論じている箇所（『探究』一三四－一三七節）に言及しているが、これも疑問である。ウィトゲンシュタインは次の様に書いていた。

> 根本においては、「事態はかくかくである」ということを命題の一般的形式として提示することは、命題とは真あるいは偽たりうるすべてのものであると説明することに等しい。なぜなら、「事態は……である」と言う代わりに、「これこれのことが真である」と私は言うこともできたであろうから。（それにまた「これこれのことが偽である」とも。）ところが、
>
> ＜ｐ＞は真である＝ｐ
>
> ＜ｐ＞は偽である＝非ｐ
>
> である。そして、命題とは真あるいは偽たりうるすべてのものであると言うことは結局は、我々の言語の中で真理関数の計算を適用できるものを私たちは命題と呼ぶということなのである。（『探究』一三六節）（C）

「ジョーンズは『＋』によって……ということを意味しているということは真（事実）である（あるいは、偽である（事実ではない））」といった様な表現は正当であるとは言えないのだろうか――こうした疑問をクリプキは、ウィトゲンシュタインの反対論者に言わせている。そして、この反論に対するウィトゲンシュタインの返答は簡潔であると言われる。すなわちウィトゲンシュタインは、「ある言明が真であると主張すること（あるいはむしろ、それに『……は事実である』という表現を付加すること）は、単にその言明そのものを主張することであり、そしてそれは真ではないと言うことはそれを否定することであ

る」[11]と反論するとクリプキは考える。上記の引用（C）が直接的にクリプキのこの議論と関連していることは明らかであろう。

クリプキがウィトゲンシュタインの反論と考えているものは、「ジョーンズは『＋』によって……ということを意味しているということは事実（真）である」という表現は妥当であるという反論者に対する反論である。そうすると、このウィトゲンシュタインの反論は、「……ということは事実（真）である」という言い方は不当であると主張していることになるのではないだろうか。推測するにクリプキの読みは次のようであろう。ある言明（命題）は事実（真）であると主張することは単にその言明を主張することであるにすぎないのだから、「……は事実（真）である」という表現は余分である。つまり、「事実」とか「真」とかいう表現は言語として何らの役割も果たしていないのである。よって、そのような表現は使わないのが適切である。[12]

このようにクリプキによると、ウィトゲンシュタインは「真」とか「事実」といった言葉を払拭しようとしているかのようであるが、引用（C）に対するクリプキのこうした読解には無理があることは明らかだと思われる。ある言明は真（事実）であると主張することは単にその言明を主張することであるとウィトゲンシュタインが言う時、彼が言いたいことは、「……は真（事実）である」という表現はそう言われる言明を主張することに何も付け加えないということであろう。だがそれは、「……は真（事実）である」という言い方は不当であるということではない。「命題は真あるいは偽たりうるすべてのもの」と我々は言うが、それは「我々の言語において真理関数の計算を適用できるものを命題と呼ぶ」ということである。言い換えると、「命題のみが真たりうるという命題は、我々が命題と呼んでいるものについてのみ『真』や『偽』を述語として付け加えるということしか述べていない」（『探究』一三六節）というわけである。「～は真である」や「～は事実である」といった言い回しに言語上の正当な役割が認められているということは確かであろう。

三　「懐疑的議論」のウィトゲンシュタイン的側面
――反還元主義批判

コリン・マッギンは、クリプキの「懐疑的議論」の決定的な誤りを示すものとして、「懐疑的議論」が本質的要素として含んでいる（とマッギンが考える）「還元主義」の仮定について指摘している。「還元主義」の仮定とは、「意味論的事実があるならば、それらは非意味論的に規定される事実に還元可能でなければならないであろう」[13]というものである。つまり、マッギンによればクリプキは、「……を意味している」という概念を用いることなしに、例えば「アディションを意味している」というこ

とを成り立たせている「事実」を提出せよと要求しているのである。ところがクリプキは、この要求を満たすと言われる見解を検討した結果、「意味論的事実」を構成する「非意味論的事実」を提示することは不可能であると知り、「意味論的事実は存在しない」という存在論的テーゼに至った。だがマッギンの考えでは、「意味論的事実は非意味論的事実に還元しえない」[14]と結論すべきなのである。

なるほどクリプキは、「懐疑的議論」ではその最初から暗黙のうちに反還元主義的見解は誤りであると考えられていたと述べている。[15]がしかし実は、（マッギンも言及していように）クリプキは、「懐疑的議論」に対する返答の候補として、意味は他のものには還元不可能であるという主張についての検討もしているのである。その主張とは次の二つである。①ある語でもってあることを意味するということは、「それ自身の独特な質を持ち、内観によって我々の各々に直接知られる、他に還元不可能な経験」[16]である。②ある語であることを意味するということは、①の内観可能な質的状態よりももっと独特なプリミティヴ的状態[17]である。

①の経験は、色を見たり、頭痛がすることと同類のものであると想定されている。まず、「＋」の記号を考えるときにはいつも何らかの内観可能な質的経験があるとして、この場合一体いかにしてこの質的経験は、「68＋57」に対して答を求められたとき、「125」と答えるべきか「5」と答えるべきかを決めることにおいて私を助けてくれるのかとクリプキは問う。そして、「そのような経験は、〔今までに遭遇したことのない〕新しい場面で何をなすべきかを私に教えてはくれないであろう」[18]がその答である。なぜなら、この質的経験なるものを私は将来様々に解釈することが可能だからである。さらにクリプキは、想定されるような、あることを意味することに固有の質的な経験なるものはそもそも存在しないという論点をウィトゲンシュタインから取り出している。「アディションを意味している」ということに唯一本質的な質的経験はないのであり、何も心に浮かんでいなくても言葉を理解していることがありうる。②の主張に対するクリプキの批判も二点にまとめることができる。まず第一に、プリミティヴな状態の本性はまったく神秘的なままである。問題の状態は、①のような内観可能な状態とは考えられないにもかかわらず、我々一人一人が例えば「＋」という記号を使う際にアディションを意味しているのだということに確信を持てるために、その記号を使うその時にはかなりの程度の確かさで我々はそのプリミティヴな状態に気づいているのだと思われている。だが、どのようにして気づくのか。それは説明されないままである。そして第二に、②のプリミティヴな状態という考えには「論理的困難」がある。なぜかというと、もしそうした状態があるとすれば、それは我々の有限な心の中にある有限な対

象であるべきだろうから。つまり、我々が意味しうるであろう対象が無限であることと、我々の心が有限であるということの間に概念的な衝突が存在するということであろう。だが、言葉の適用の全体が、「ある奇妙な仕方で」(『探究』一九五節)、「何らかの意味で現に存在している」(同上)のではないのか。しかし、「私の心の過去の有限な何らかの状態の存在は、もし私がそれと一致しようと望み、その状態を覚えており、計算間違いをしなければ、その時、任意に大きな数のアディションの問題に対して私がある確定した答を与えなければならないということを如何にして導くことができるのであろうか。このことが依然として神秘のまま残るのである」[19]。

結局、反還元主義的見解もまた、「懐疑的議論」に対する反論にはなりえないというのがクリプキの主張である。

これに対してマッギンは、①の主張は反還元主義的見解の最も好ましい形になっていないと考え、②の方に注目している。しかし、彼の目には、クリプキは②の主張を正当に扱っていないと映る[20]。②へのクリプキの第一の批判に対しては、①の「内観」とは違う正当な「内観」の観念が存在すると言われる。マッギンによれば、意図していること、意味していることを知るようになるということは、質的経験とは違った種類の「内観」なのである。この「内観」に哲学的な理論を与えることは困難であるが、理論が欠如しているというだけでそうした「内観」の存在を疑う十分な理由が与えられるわけではない。第二の批判に関しては、あることを意味するというプリミティヴな状態は異なる状況での無数の帰結を何らかの仕方で生み出すものでなければならないが、このことが解きがたい「論理的困難」を引き起こすとは思えないと言われる。例えば可溶性という物理的なディスポジション(disposition)が無数の場面で現われうる性質であるという考えの内に「論理的困難」がないように、意味するという状態についても「論理的困難」は存在しない。「意味するということの基底にあるものは我々の自然な傾向なのであり、こうした傾向は『無数の』状況において言語的行動を生み出す能力を持っているのである」[21]。

さて、この両者の対立をどう見るべきか。私は、クリプキの議論はある重要な点においてウィトゲンシュタインの議論に沿ったものになっているのではないかと考える。もちろん、すでに述べたようにウィトゲンシュタインは、「懐疑的パラドックス」を受け入れてはいなかったし(本論第一章)、「意味は存在しない」という存在論的結論に至る懐疑論を支持してもいなかった(本論第二章)。では、それ以外でクリプキとウィトゲンシュタインを結ぶ線は何か。それは、上記の①②に対するクリプキの批判に示されているように、「言語使用における正当化」(「言語規則の規範性」)の問題である。つまり、「『68+57』に対して答を求められたとき、なぜ私は、『125』と言うべきである

ということに対してそんなに確信を持っているのか」[22]という論点である。これは、本論第二章で言及した「懐疑的議論」の「認識論的側面」の視点であった。「規則に従う」という問題に取り組んでいた際のウィトゲンシュタインの視点もまた同様のものであっただろう。[23] クリプキの「懐疑的議論」のうち、「存在論的側面」はウィトゲンシュタイン解釈としても、実際の我々の言語使用の点からも認めることができないが、もう一つの「認識論的側面」はウィトゲンシュタインとクリプキにとって重要な視座を形成していると考えられるのである。

本論第二章で述べたように、「そのとき私は～を意味していた（意図していた）」といったような表現を日常的に使うことの妥当性が問題とされているのではない。拒否されるべきは、「内観可能な質的経験」とか「より独特な状態」とかいった概念によってそれらの表現についての哲学的な分析を与えようとする立場なのだ（特に、『探究』一八七―一九七節）。意味するということに関する正当な「内観」が存在するというマッギンの発言にはこの哲学的分析への志向が見て取れる。意味の正当な「内観」があるとして、言葉を使用する際に我々は各々そうした「内観」に何らかの仕方で従っているということであろうか。もしそうなら、実際我々はそうした「内観」にどのように従っているのだろうか（それは内的な声・命令のごときものか）。これが、クリプキの「懐疑的議論」がウィトゲンシュタインと共有する視点、すなわち「言語使用の正当化」の問題の中身であった。マッギンは、②の見解がクリプキの懐疑的問題に対する解答になっていると言いながら、その実「言語使用の正当化」の問いに答えていないのである。また、クリプキの第二の批判に対する反論として、反還元主義的な見解を擁護する場面で、「ディスポジション（傾性）」とか「能力」とかいう、還元主義的見解で中心的役割を演じる概念を持ち出してきているのも問題である。まずもって、こうした概念でもって基礎付けをすること自体が反還元主義的見解の放棄を意味するのではないだろうか。さらに、以下での考察が明らかにするであろうように、この還元主義的見解そのものがクリプキの「言語使用の正当化」の問題をクリアーしていないと考えられるのである。[24]

四　「ディスポジション」とウィトゲンシュタイン

還元主義的見解の一事例と考えられるディスポジション説の批判にクリプキは多くの紙面を割いている。まず、ウィトゲンシュタインの次の記述に注目しなければならない。

> だが、けっして理解を「心的過程」と考えるな――それはあなたを混乱させる言い方なのだから。そうではなく、次のように問え。いったいいかなる場合に、いかなる状況のもと

で、「いまや私は〔数列を〕どのように続ければよいのか知っている」と言うのか、と。つまり、その式が思い浮かんだとして。——

理解に特徴的な過程（心的過程もまた）が存在するという意味では、理解は心的過程ではない。

（痛みが増したり和らいだりすること、あるメロディーや文が聞こえること、これらは心的過程である。）（『探究』一五四節）

ある人が昨日からあることを「途切れなく」信じている、理解している、意図していると我々は実際めったに言わない。信じていることの中断とは信じていない期間であり、例えば眠る場合のように、自分が信じている対象から注意をそらすことではない。

（〈知っている〉と〈意識している〉の相違）（『断片』[25] 八五節）

ウィトゲンシュタインは二つのタイプの概念を対比しているのである。第一のタイプは、〈痛む〉とか、〈あるメロディーを聞く〉等々の意識状態である。それに対し第二のタイプには、〈理解している〉、〈意図している〉、そして〈意味している〉等々が属する。そして、『心理学の哲学』[26] II四五節でウィトゲンシュタインは、「私がこれら後者〔第二のタイプ〕をさしあたり『ディスポジション』と呼ぶならば、ディスポジションと意識状態の間の重要な相違は、ディスポジションは意識の中断、あるいは注意をそらすことによっては中断されないということである」と述べている。ウィトゲンシュタインは、「ディスポジション」という表現を使うことによって、〈痛む〉といった表現と〈意味する〉といった表現の使用上の違いを顕にしようとしているように思われる。「意味はディスポジション的なものである」といった言い方は必ずしも否定されてはいないのである。また、『探究』一四九節ではウィトゲンシュタインは次のように述べている。

ABCの知識は心の状態であると言う人は、ある心的装置（例えば我々の脳）の状態のことを考え、それによってこの知識の現われが説明されると考えている。そのような状態を人はディスポジションと呼ぶ。しかし、この状態に対して二つの規準が要求される限り、すなわちその装置の働きとは別に、その装置の構造の認識までもが要求される限り、ここで心の状態について語ることには問題がある。（D）

ここでウィトゲンシュタインが言っていることはマッギンが述べているように[27]、「ディスポジション」について語ることが誤っ

た考え方――すなわち、ある人がABCを知っているかどうかを見分けるのに、彼が為していることを見ることと、彼の心的装置（脳）の構造を調べること、この二つの別々のやり方があるという考え――を伴いやすいので問題であるということと考えることはできよう。だが次のように言い換えることによってここでのポイントが明らかになるのではないだろうか。つまり、「ABCを知っている」ということは「ディスポジション」的なことであるともちろん言っていいのだが、そうした語り方は誤った見方を伴いやすいので注意が必要である、と。さらに、『探究』一八七節では次のように言われる。

> 「だが私は、命令を与えたときにも、彼が一〇〇〇の次には一〇〇二と書くべきであることをすでに知っていたのだ！」――確かに。それどころか、そのとき君はそのことを意味していたとさえ言える。ただ、「知る」とか「意味する」という語の文法に迷わされてはならない。なぜなら、君の言わんとするところは、そのとき自分が一〇〇〇から一〇〇二への移行について考えていたということではないからだ――かりにその移行については考えていたとしても、他の移行のことまで考えていたわけではないだろう。「私はそのときすでに……と知っていた」ということで君が言わんとしているのは、「そのとき、一〇〇〇の次にどの数を書くべきなのかと尋ねられたならば、私は一〇〇二と答えただろう」といったようなことなのだ。そしてそのことについて私は疑いを抱いてはいない。それは例えば、「彼がそのとき水の中に落ちたならば、私は彼を追って飛び込んだだろう」といった類の仮定なのである。――では、君の考えはどこが間違っていたのか。

クリプキの例で言えば、「私は、『68＋57』の答は『125』であるべきだということを既に知っていた」という言い方は可能なのである。いや、実際我々はそうした言い方をしているであろう。だが見誤ってはならないのは、ある人がその発言をする場合、その人は「68＋57」の答は「125」であるということをすでに考えていたというわけではないという点である。そして、実際その人がその発言で言おうとしていることは、「そのとき『68＋57』の答を尋ねられたならば、私は『125』と答えたであろう」といったようなことなのである。

クリプキの懐疑論者の主眼点は、「意味している」という「事実」は何かということであった。そしてこの「事実」探しは無駄であると言われた。だが、本論第二章で見たように、このクリプキの「懐疑的議論」の「存在論的側面」はウィトゲンシュタンの問題ではない。日常的な言語使用という視点からの意味についての考察――これがウィトゲンシュタインの立場である。それ故、もしクリプキの議論が「意味するとはディスポジ

ション的なことである」といった言い方を否定しているとするなら、それはウィトゲンシュタインに対する誤解である。

五　「懐疑的議論」のウィトゲンシュタイン的側面
——還元主義批判

拒否されるべきはここでも（本論第二・三章参照）、「意味はディスポジション的なことである」といった言い方ではなく、「意味」を「ディスポジション」によって還元的に分析（定義）しようとする哲学的立場である。[28]

クリプキによるとディスポジション説は、〈『＋』によってアディションを意味しているということは、いかなる『x＋y』に対して答が求められたときでも、その答としてxとyの和を与えるよう傾性づけられている〉という分析を与える。過去について言えば、「実際私は過去においてプラスを意味していたと言うことは、もし私が過去において『68＋57』について問われたならば、私は『125』と答えたであろう——そうであったに違いない！——と言うことなのである。仮定により私は実際そう問われはしなかった。しかし、それにもかかわらずそのようなディスポジションは存在していたのである」[29]。クリプキのディスポジション説についての議論は実質的に、「ディスポジション」による「意味」の哲学的分析に対する批判を目指すものなのだ。

こうした「意味」分析の誤りをクリプキは次のように示そうとしている。[30] まず、(a)我々のディスポジションの全体は有限であるという議論である。我々にはあまりにも大きすぎて計算できないような数があり、そうした数の和の計算は不可能である。そこに、和とは違う関数を意味していたという仮説の可能性が存在することになる。ここで、理想化された条件（例えば、私の脳にそうした非常に大きな数の和を遂行するのに十分な能力が与えられている、等々）の下での私の反応に訴えるという方法があるかもしれない。しかしその手続きは循環を含むことになる。なぜなら、理想化された無限の条件のもとで私がどの関数を意味しているのかが確定されるのは、私がどの関数を意味しているのかという問題が既に解決されている場合であるから。次に、(b)我々はほとんどみな、誤りを犯すディスポジションを持っていると言われる。つまり、ある人がある数に対しては計算間違いを犯すよう傾性づけられているということがありうる。傾性論者の立場では、ある人がどんな関数を意味しているかはその人のディスポジションから読み取られることになる。従って、常識的にはある人はアディションを意味しているが、ある数に関して系統的な計算間違いをすると言われる場面で、傾性論者はその人はアディションとは別の関数を意味していると言わざるをえないことになる。この困難を、誤りを犯すディスポジションと正しい答を出すディスポジションの区別を

することによって克服することはできない。こうした区別ができるためには、何が正しいディスポジションで、何が誤ったディスポジションかがあらかじめ確定されていなければならないからである。だがまさにこの点が問題であった。

私は、アディションを意味しているのか、それともクワディションを意味しているか。もしアディションを意味しているとするならば、その意図に従って行為するなら、「125」と答えるべきである。あるいは、クワディションを意味しているならば「5」と答えるべきである。いったい私はこのどちらに当てはまるのか。傾性論者はこの問に答えていない。つまり、ディスポジション説が与える説明は、「個々の新しい事例において私が何をなすべきかを私に告げねばならない」[31]という「正当化」(「規範性」)の条件を満たしていないのである。この条件を満たさないかぎり、「意味」を「ディスポジション」で定義するという試みは循環せざるをえないということになる。クリプキは、「結局のところ、ディスポジション的な説明に対するほとんど全ての反論はこの一点〔正当化の条件を満たしていないということ〕に帰着する」[32]と述べている。

以上のディスポジション説批判の展開の仕方はクリプキ独自のものである。また、ディスポジション説の論駁はウィトゲンシュタインにとってそれ程興味を引く問題でもなかったと言えるかもしれない。だが、ウィトゲンシュタインにとってもディスポジション説的な説明は批判されるべき対象であろう。ディスポジション説批判に関連するウィトゲンシュタイン自身の議論は次章で言及される。

六　能力説批判

第三章で述べたようにマッギンは、反還元主義的見解がクリプキの「懐疑的議論」の決定的な反論になっていると考えていたのだが、さらに彼は、還元主義的見解としての能力説も「懐疑的議論」批判において有効であると主張している。彼によれば、能力説はディスポジション説とは別物であり、クリプキは両者を同一視するという誤りを犯していたことになる。マッギンが見る両者の相違は簡単に言うと、ディスポジションはある行動を生み出すよう作用している諸要素の総和であり、他方で能力はある特定の状況で行動を決定するさいに働くただ一つの要素であるという点に、あるいは「能力」の概念は、クリプキが言及したような反事実的条件文から導かれうるものよりもさらに微妙で限定されたものであるという点にある。[33]

確かにウィトゲンシュタインは次のように言っている。

> 「知っている」という語の文法は明らかに、「能力がある」や「可能である」という語の文法と密接に関係している。し

かし、それはまた「理解する」という語の文法とも密接に関係している。（ある技術を〈習得すること〉）（『探究』一五〇節）

ひとつの文を理解するということは、ひとつの言語を理解するということ。ひとつの言語を理解するということは、ひとつの技術を習得するということ。（『探究』一九九節）

実際日常の我々の言語の使用においては、「理解している」とか「意味している」という言葉の使い方は、「能力がある」とか「技術を習得している」といった言葉の使い方と密接な関係にあると言えるであろう。それゆえ、先のディスポジションの場合と同様に、「ある言葉を理解しているということはその言葉を使う能力をもっていることである」といった言い方は可能であり、実際我々はそのような言い方をしているであろう。また、能力というものを、ディスポジションのように反事実的条件文によってとらえることはできないものと考え、ディスポジションとは違った意味合いのもとに、「ある言葉であることを意味するということはその言葉を使う能力を獲得することである」といった言い方をすることは可能であるとも言えよう。それ故マッギンの、「ある記号を理解しているということは、ある能力をもっていることであり、ある技術を習得していることであり、そして実践的技能を有していることなのである」[34]という発言には同意できる。もしそのような言い方は不当であるとクリプキが主張しているとすれば、それは誤りであろう。

しかし、だからといって能力説が正しいということではない。能力説の問題点もまた、「言語の規範性」という視点において明らかになる。マッギンによれば能力説は「規範性」を次のように説明する。つまり、「t時において『＋』でアディションを意味しているということは、t時において『＋』に対してプラスする能力を結びつけることであり、t'時において『＋』によって同じことを意味するということは、t'時においてt時と同じ能力を『＋』に結びつけることである」[35]。これに対するさらなる説明は与えられていない。だが、これだけでは、なぜ能力説が「規範性」の問題に答えていることになるのか理解できない。その説明は、「理解（意味）する能力」という概念を前提としている。

実はマッギンは、「能力」の概念を物理主義的枠組みの中で論じているのである。即ち、意味する（理解する）ということは脳の物理的状態として実現されているのであり、この脳の物理的状態は因果的に言語行動を説明するものである。よって、意味するということは、言語使用を引き起こす「因果的源泉」である心的状態であるということになる。さらに、意味するということは言語使用の「規範的源泉」でもある。なぜなら、「ある

言語使用がなぜ適切かは、話者によるその言葉の理解（それによって彼が意味しているもの）との一致を指摘することによって説明される[36]」から。あることを理解（意味）しているということは脳のある物理的状態として具体化されているのであるから、言語使用の「適切さ」（「正当性」）はその具体化された理解の状態との一致によって説明されるということであろう。そしてここで、ある記号を理解するようになるということはある能力を獲得することであるという視点を媒介にして、先の能力説による「規範性」の説明を次のように言い直すことができよう。すなわち、t 時に「＋」でアディションを意味しているということは、t 時に「＋」にプラスするという、脳のある物理的状態として実現されている能力を結びつけることであり、t' 時に「＋」で同じことを意味するとは、t' 時に t 時と同じ能力（脳のある物理的状態として実現されている）を「＋」に結びつけることである。この説明は成功しているのであろうか。ポイントは、「脳の物理的状態」という概念の位置付けである。

この問題に関してはウィトゲンシュタインはあまり論じていないのだが、本論第四章の引用（D）でのウィトゲンシュタインの議論がここで関係してくる。そこでの議論はディスポジションとの関連からなされたものであった。ディスポジション説に関するウィトゲンシュタインの議論は同時に、能力説に関するものともなっている。

引用（D）で言われているのは要するに、ある人がＡＢＣの知識をもっているかどうかを我々は、彼によるその知識の実際の適用から判断するのであって、彼の脳の状態を調べることによってではないということである。これに関して、しかしだからといって、実際に彼の脳の中がおがくずで一杯であってもかまわないということが帰結するわけではないとマッギンは言う。確かに、『断片』六〇八－六一〇節での論述は、ウィトゲンシュタインがこのような帰結を受け入れているかのように思わせるものである。

マッギンによると、理解の状態は脳の状態に還元可能であるという強い主張をする必要はない。しかし、「いかなる理解状態も何らかの形で物理的状態として実現されており、前者が因果的な力を持つのは後者に何らかの基礎を持つからである[37]」。この考え方が、引用（D）で注意されているような、理解帰属の非行動的な規準を導入することになるのではないかというウィトゲンシュタイン的な反論に対して、マッギンは次のような返答を用意している。すなわち、ある脳の物理的状態がある言葉の理解の物理的基礎であるという資格が与えられるのは、話者によるその言葉の実際の使用を説明する際にその脳の物理的状態が適切な役割を演じていることによってである。言い換えると、「ある人にある心的状態が帰属させられるのは、彼が正当な行動を示した場合だけであり、また脳の状態がこの心的状態を実

現するのは、それがこの行動の因果的な原因となっている場合だけなのである」[38]。

だが、そうするとつまり、引用（D）でのウィトゲンシュタインと同様マッギンもまた、発話者が何を理解（意味）しているかは、彼の実際の言語行動から独立に、脳の神経系の吟味によって確定することはできないと認めているということになる。彼が何を意味しているかが決定されるのは、その人が実際どのような言語使用をするのかということによってなのである。そして、「脳の物理的状態」という概念は、理解・意味（能力）を経験的・因果的に基礎付け、その働きを経験的・因果的に説明するという点にその役割があるということになろう。

生理的心理学は経験科学として因果的研究を行なう。しかし、経験的・因果的研究をいくら積み重ねても「言語規則の規範性」には到達しない。それは、理解（意味）する能力を前提としているのだ。クリプキが問題としていた「言語規則の規範性」は依然として説明されないままなのである[39]。

七　結論と課題

クリプキの懐疑論のテーゼは、「私が～を意味する」というような「事実」は存在しないというものであった。ここから、「意味」なるものの観念はまったく雲散霧消してしまい、言語はすべて無意味であるという結論になるのではないかというクリプキの発言が出てくることになった。しかし、このような立場は、ウィトゲンシュタインのものではないし、我々の実際の言語活動とも噛み合っていない。

だが、クリプキの「懐疑的議論」には別の議論の道筋が存在している――これが論者の読解であった。それは、我々がそれぞれ「私は～を意味している」と言うときの「言語使用の正当化」（「言語規則の規範性」）の問題についての議論である。質的状態説、ディスポジション説等々の哲学理論はこの問題に答えようとしているが、結局失敗せざるをえなかった。これら哲学理論は、自己の本質的論点である「言語使用の正当化」という概念の説明に成功していないのである。この「言語使用の正当化」ということについての哲学理論の論駁こそが、クリプキの「懐疑的議論」とウィトゲンシュタインを結ぶ論点として注目すべきものではないだろうか。もしそうだとするなら、「私が～を意味する」という「事実」は存在しないのであり、言語は無意味であるという結論とは別の結論がクリプキの「懐疑的議論」において見て取られるべきであるように思われる。すなわち、我々がおのおの行なう言葉の適用は「暗黒の中における正当化されない跳躍」[40]なのである。「懐疑的議論の核心は、我々は究極的には我々の行為を正当化しうるいかなる理由もなしに行為するレベルにまで至るということである。我々は躊躇

なしに、しかし盲目的に行為するのである」[41]。ウィトゲンシュタインも次のように記す。

規則に従っているとき、私は選択をしない。
私は規則に盲目的に従っている。(『探究』二二九節)

しかし、「言語使用の正当化」(「規則に従う」)についての議論はこれで終わったわけではない。ウィトゲンシュタインは、「適用のそのつど、我々が〈規則に従う〉とか〈規則に反する〉と呼ぶことのうちにおのずと現われてくる規則把握がある」(『探究』二〇一節)と言っていた。「言語使用の正当化」という議論にはさらに先があるのだ。この問題は、クリプキのウィトゲンシュタイン解釈のもう一方の構成要素である「懐疑的解決」の議論と関連していくことになる。

注

(1) Saul A. Kripke, *Wittgenstein on Rules and Private Language*, Harvard University Press, 1982. 本論引用文中の傍点のあるものは原文ではイタリック体である。
(2) Ludwig Wittgenstein, *Philosophische Untersuchungen*, suhrkamp taschenbuch wissenschaft 501.
(3) 後半部分については別の機会に論じる予定である。
(4) Kripke, op. cit., p. 7, p. 60.
(5) 黒崎宏氏はこのような解釈をしている(補遺「ウィトゲンシュタインのパラドックス」、『ウィトゲンシュタイン　哲学的探求　第II部　読解』(産業図書、一九九四年)一二五―一四一頁を見よ)。
(6) Kripke, op. cit., pp. 7-22.
(7) Ibid., p. 71. Cf. ibid., p. 22.
(8) Cf. Colin McGinn, *Wittgenstein on Meaning*, Basil Blackwell, 1984, p. 62.
(9) Kripke, op. cit., p. 21.
(10) Ibid., p. 69.
(11) Ibid., p. 86.
(12) クリプキは、この見解に対する反論に言及した後で、その反論に対するウィトゲンシュタインの返答として、「我々の言語において真理関数の計算が適用される文、それを我々は命題と呼ぶのであり、そしてそれゆえ我々はそれを真とか偽とか呼ぶのである。すなわち、真理関数の計算がある文に適用されるということはまさに、我々の言語ゲームにおける根源的部分であり、より深い部分からの説明を受けるなどということはありえないのである」(ibid.)という説明を与えている。だが、クリプキ自身の議論からすればこの説明は奇妙である。なぜなら、この説明からすると、ある文を「真」とか「偽」とか呼ぶことは正当であるということになるからである。
(13) McGinn, op. cit., pp. 150-151.
(14) Ibid., p. 151.
(15) Kripke, op. cit., p. 51.
(16) Ibid., p. 41.
(17) Ibid., p. 51.
(18) Ibid., p. 43. 〔 〕内は論者の補足。以下同様。
(19) Ibid., p. 53.
(20) McGinn, op. cit., pp. 159-164.
(21) Ibid., p. 164.
(22) Kripke, op. cit., p. 41.
(23) クリプキの議論の仕方は、言葉の過去の使用法と現在の使用法を区別

し、その間の一致関係を問うというものであった。この定式化は、クリプキ自身が認めているように、ウィトゲンシュタインの定式化とは異なったものである（ibid., pp. 12-13）。ウィトゲンシュタインは、「私が言葉を使うとき、どのようにして言葉の規則はその適用を確定するのか」といった言い方をしている。だが、この相違はここでは問題ではない。なぜなら私は、「言語使用の正当化」（「言語規則の規範性」）という側面に、ウィトゲンシュタインとクリプキのつながりを見いだしているのであるから。

(24) クリスピン・ライトはクリプキを批判して、「人が以前に『ミドリ』という語で意味していたことは、ある種の一般的な意図――直観的な考え方に従って考えられるところの意図――をもっていたということにある、こう考えると特に居心地がよくなるというのが論点ではない。懐疑論的議論はこの提案を退けるだけの破壊力を絶対にもっていないというのが論点なのである」（Crispin Wright, "Kripke's Account of the Argument against Private Language", *the Journal of Philosophy* LXXXI (1984), p. 777）と述べている。「～を意図（意味）していた」といった表現を我々は実際日常使うように使っているのである。だがそれは、意図（意味）についての哲学的な分析に従って我々が言語を使用しているということではない。

(25) Ludwig Wittgenstein, *Zettel*, suhrkamp taschenbuch wissenschaft 508.

(26) Ludwig Wittgenstein, *Bemerkungen über die Philosophie der Psychologie*, suhrkamp taschenbuch wissenschaft 507.

(27) McGinn, op. cit., p. 74.

(28) クリプキ自身もこの点に気づいていた。See Kripke, op. cit., p. 25, p. 48.

(29) Ibid., p. 23.

(30) Ibid., pp. 26-32.

(31) Ibid., p. 24.

(32) Ibid.

(33) McGinn, op. cit., pp. 172-174.

(34) Ibid., p. 30.

(35) Ibid., p. 174.

(36) Ibid., p. 110.

(37) Ibid., p. 113.

(38) Ibid., p. 116.

(39) マッギンは、第三章の注(32)で、心の状態の証拠として脳の状態を派生的に使う可能性に言及する。すなわち、「ひとたび行動規準に基づいて心的状態をある人に帰属させたなら、何がそれと対応する脳の状態であるか確定でき、その後は行動とは独立にこれに頼ることができる」。そしてこれに続けて、「しかしながら、これは必然的に派生的であり、つねに最初の行動規準に応じるものとなっている」と述べられている。ここでマッギンが何を言いたいのかは明確ではないが、おそらく言語使用の因果的基礎であるものが同時に規範的基礎であるということを保障したいがためにこのようなことを言い出したのであろう。だがそれは無駄であろう。この可能性は、必然的に派生的であり、つねに最初の行動規準に応じるものなのである。つまり、それは言語行動を前提するのだ。また、脳の物理的状態が確定されると言われるが、これはどういうことなのであろう。生理的心理学が最終的に、意味と対応する脳の物理的状態を、これ以外にはありえないという仕方で確定するということであろうか。しかし、経験科学理論はただ一つに決まるものなのか。複数可能ではないのか（経験理論の決定不全性）。すなわち、意味を構成する物理的状態がどういうものかも採用する理論に相対的にのみ決まるものではないだろうか。

さらにマッギンは、第三章の注(33)で、同一の理解状態が異なった物理的原因によって実現される可能性を示唆している。だがそうすると、異なった理解状態が同一の物理的原因によって実現されるという可能性はないのだろうか。あるいは、同一の理解状態が人それぞれで異なった物理的原因によって実現されているという可能性、さらに同一人物においてさえその時々によって異なった物理的原因によって

同一の理解状態が実現されているという可能性はないのか。

ディスポジション説においても、ディスポジションは脳の物理的状態として実現されていると考えられているのであろう。ディスポジション説との関係でマッギンと基本的に同じ立場からクリプキ批判を展開するものとして次の論文がある。Warren Goldfarb, "Kripke on Wittgenstein on Rules", *the Journal of Philosophy* LXXXII (1985). ここでも、争点である「言語使用の正当性」(「言語規則の規範性」) の問題についての誤解がある。

(40) Kripke, op. cit., p. 15. Cf. ibid., p. 10, p. 17, p. 23, p. 55.

(41) Ibid., p. 87. Cf. ibid., p. 17.

(おおいしとしひろ　大学院博士後期課程単位取得退学)